

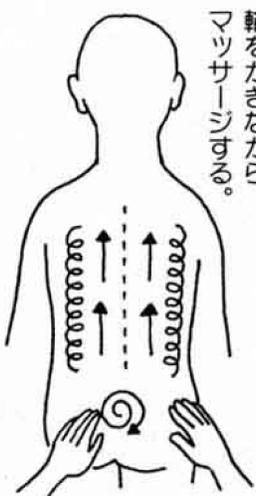
シリーズ

家庭看護のコツ

その10

寒くなって、布団の中での生活がふえてくると、床ずれができやすくなります。皮膚が赤くなったら、注意信号です。こんな手当を試みましょう。

- ①熱めのタオルを3、4回患部に当てる。
- ②乾いたタオルでよくふく。
- ③患部の周りを、輪をかきながらマッサージ。



輪をかきながら
マッサージする。

相談は……
保健婦人センター ☎64-8992

中央町2丁目の山崎国男さんの家は、もとげた屋さん。山崎さんが10歳くらいだった大正末期、お正月が近づくと、店はげたを買う人でとてもにぎわったそうです。

山崎国男さん (中央町2)



は、福島県
のこぎり
に引き受け
ていました。
まで、一手
そして販売
製造、卸、
在のげたの
い、近郷近
本店」と言



のこぎり

今回、市立博物館に寄贈していただいたのは、げたをつくるときに使ったのこぎりです。山崎さんの家は、屋号を「虎屋履物

や栃木県から買って来た、質の良いキリの木を切るのに使いました。刃渡り六十センチ、幅は、二十三センチもあるのこぎりです。

げたをつくるときは、この大きなのこぎりです。まずキリの丸太を八寸(二十四センチ)の長さに切り、次に縦に四つ、横に二つに切ると、これが男物のげたをつくるものになるのだそうです。

この作業のことを「木取る」と言い、作業する人のことを「木びき」と呼びました。昔は、すべて分業の手作業でしたから、職人さんたちも二十人くらいはいたそうです。そのほかにも、番頭さんやご飯の支度をする女の人も、大勢の人たちが働いていました。昭和の初期になって電動化が始まると、もう、のこぎりも使われなくなりました。

あなたの生活便利メモ 19

初笑いは 吉本新喜劇で

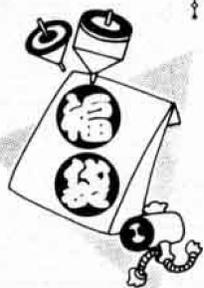


ひらのふみよ
平野文秀さん
☎六一六三六二

いつも「いいものを安く提供するのが仕事だ」と考えているのが、富士文化センターの平野文秀さん。仕事とは、イベントや公演のたぐい。照明や音響、そしてチケットの販売までをこなしながら、芸能人をかいま見ることのできる世界とか。年末から来年にかけての、自主文化事業をお知らせします。

「一番大きな公演と言ったら、二月八日に予定している『吉本新喜劇』。新しい年に、たっぷり笑っていただきます。チャリィー・浜さんの喜劇とか、今いくよ・くるよさんの漫才など。大体二時間の公演で、チケットの売り出しは十二月上旬です。そのほかには、『ウィーン少年合唱団』、アメリカの金管バンド『エンパイア・プラス』などがあります。

年末の公演は、十二月十五日の『森は生きている』。当日券もありますから、ぜひおいでください」



遊々タイム 18 【お飾り】

お飾りは、お正月には欠かせないもの。ほとんどの人は買ってくるのだと思いますが、厚原の後藤達司さん(73歳)は、自分の家のはもちろんのこと、親類の分までみんなつくってしまいます。

しかも、玄関の飾りから神棚の飾り、床の間用の宝船まで、すべて玄人はだしのできばえ。日の丸や赤いエビなどが、緑色のお飾りによくはえます。



こちら編集室

通勤途中にお寺があります。そこにご住職が道路に面した壁に、一週間ごと何かしら紙に書いた言葉をかけてくれます。「山は高く、すそ野は広い」とか、「もういいと、言われながらも雨は降る」とか。最近、私が一番気に入っているのは、「花をめぐる人は多いが、その根を褒める人は少ない」の言葉。花になれるのは、ほんの一握りの人。せめて、力強い根になりたいと思うのです。